記事紹介

二面
東大闘争が示すもの
動揺する京大〝統一派〟＝東大民青に自己批判要求
三面
京大教養、無期限スト
大阪堺経専で全員高校編入を要求
四面
マルクーゼは語る

新左翼

1969年
2月5日
第19号
月3回5、15、25日発行
1部　15円
1カ月50円　半年300円
1カ年600円〒共

発行所
新左翼社
大阪市大淀区本庄川崎町
2—10　トミヤビル
電話（371）5304
振替口座　大阪　88555
昭和43年12月12日
第三種郵便物認可

全国に第二、第三の安田解放講堂を！

国家権力と全面対決

労学市民に決起呼びかけ

昨年一月二十九日、「登録医制度反対」「研修協約獲得」をかかげて医学部学生が無期限ストに突入してから開始された東大闘争は一月十八・十九日頂点に達した。

十八・十九日東大安田講堂攻防戦を闘いぬいたすべての学生に対し、きわめて熾烈な攻撃がかけられた。国家権力は八千名の機動隊でもって安田講堂のまわりをかため、陸からは放水車によって、空からは四台のヘリコプターでガス水放射、一万発以上の催涙弾、レッカー車、その他ありとあらゆる道具を用い安田講堂にたてこもる学生三〇〇名に重軽傷を負せ、排除をはかった。

この安田講堂の排除に対して、東京の学生、反戦委に結集する労働者はこぞって東大本郷、中大、日大、明大を結ぶ一帯で官憲の暴力に反撃し、解放区をつくり出す闘いを展開した。一帯はバリケードでかこまれ、群集がそのバリケードを守り、機動隊がこれを排除するなら、火炎ビンをもってこれと立ちむかう闘いとして安田講堂の攻防戦と同時に進展した。学生の闘いに対して、ヒロイズムとか、おごった気持だとか中傷されているが、十八・十九日を果敢に闘った学生たちは、自分たちだけの闘いで、プロレタリア革命をおこせるなどと考えたりしていないし、労働者が学生の闘いそのものを主体的に受けとめ、労働者がその生産点におけるストをはじめ、学生の闘いに呼応した闘いを職場において展開することをねがって闘った。

この闘争を指導した東大全学共闘会議の山本義隆代表は、すべての闘う労働者、農民、学生、市民へ次のように呼びかけている。これは一月二十四日北大阪反戦の集会でよみあげられたものである。

東大全共闘　山本義隆代表

全国の闘う労働者、市民のみなさん！

東大闘争を終始、非妥協的に闘いぬき、去る一月十八・十九日の両日、全国の先進的学生とともに全国学園闘争の拠点、安田解放講堂を三十五時間にわたって守りぬいた、東大闘争全学共闘会議を代表して訴えます。

十八・十九両日の東大本郷構内の熾烈な闘いと、それに呼応して闘われた東京神田の万余を越す戦闘的市民をまじえた闘いは、全国学園闘争の頂点に位置していた東大闘争の普遍的、全人民的質を一挙に顕在化せしめた。

東大全共闘が一切の妥協を許さず、一切の改良主義的集約を許さないが故に、権力はその総力をあげて闘争の圧殺にのりだした。

八千名の機動隊、数百の私服、三台のレッカー車、そしてヘリコプター、万を越すガス弾、放水でもって全共闘の学園追放を彼らは試みた。だが東大全共闘を中心とする数百の学友の英雄的闘いは三十五時間にわたり、機動隊を撃退した。

安田解放講堂をはじめ、法学部で闘った同志たちは数百名の不当逮捕と、多くの重軽傷にもかかわらず最後まで闘いぬいた。この燃え上がる三十五時間は、権力がどのような暴力を用いようとも、一年間の苦闘がえぐりだした問題点を何一つ解決せず、矛盾の隠ぺいの上に立つ学園の正常化を、われわれが決して許すものでないことを表わした。

また、これに呼応した神田地区での学生、反戦青年委員会、市民のバリケード戦は、たとえ東大全共闘を圧殺しても、それをはるかに上まわる人民の決起をもたらすことを示した。

かくて、大学のブルジョア的秩序回復、学園の正常化とそのメルクマールとしてあった入試実施は阻止された。いま、この十八・十九両日の闘いの巨大な意義をあらためてここに確認し、合せて七六七名にのぼる不当逮捕と、多くの学友を傷つけた機動隊の蛮行を、怒りをこめて弾劾する。

現在、東大闘争を過去形で語ることは許されない。真に闘う者の耳には三十五時間の炎の中に、歴史の前進の地ひびきを聞くことができる。だが、いまここであらためて東大闘争の本質は何であったのかを、かえりみる必要がある。

昨年一月二十九日に始まった東大医学部の闘いは、決して医学生という特殊階層の利害を表明するものではなく、その本質は医療労働者に対する労働強化、収奪と六九年健保抜本改悪を頂点とする、勤労大衆からの医療経費収奪を軸とする医療の帝国主義的再編に対する、すぐれて全人民的な闘争であった。

この闘争に対し、政府・厚生省および独占資本と結託した医学部当局は、学内の秩序をみだしたという理由でもって、三月十一日大量十七名の処分を出した。教授会は自主的に学生の闘いを弾劾することでもって、医療の再編を担っていった。

この処分撤回闘争に対し、大学当局はまさに大学の自治を守るべく、六月十七日千数百名の機動隊を導入したのであった。大学の自治とは、権力機構に包摂された大学のブルジョア的秩序と、その中で教授会がゆるされて持つ、相対的自立性という特権を、意味するものでしかないことが明らかになった。

国家社会の要請に応えるものとして大学があり、教育研究が独占資本のために営まれなければならない故に、その秩序は暴力装置でもって、最終的に保障されていることが明らかになった。

かくて闘争は全東大に燃え広がり、ブルジョア大学を根底的に問いつめる七項目要求をかかげて、大学の帝国主義的再編と、それを自ら担っている国大協路線を、粉砕する闘いとして発展していく。そしてこの闘いを担っていたのが七月二日の本部封鎖闘争を軸とした東大全共闘であった。東大闘争は日大闘争とならび、かつてない大衆性と持続性と戦闘性をもって展開された。のみならず医局員、大学院生、若手研究者が自らの全存在をかけて決起し、武装し、自らの研究室、医局を封鎖、自主管理し、そのことによって東京大学の根本的矛盾をえぐり出していった。

それは東大で行なわれているブルジョア的な教育、研究、医療の一切を拒否し、それを支えている医局講座制、研究制度などの解体をめざし、さらにそれを担っている自らをも含めた教官、研究者、学生を弾劾する闘いであった。かくて、資本主義日本百年の歴史において、常に権力とともにあった東京大学の、反人民的な一切が裁かれんとした。だが東大の矛盾は現在の帝国主義日本の矛盾の東大内における突出であったが故に、東大闘争は個別東大ワク内での改良主義的集約を許さず、帝国主義国家権力と対決せざるを得ないものであった。

いわんや、六〇年代後半、日本帝国主義が東南アジア進出をはじめ、全面的な国内体制の再編、整備を行ない、その中で大学の再編を位置づけているとき、その対決は非和解的質をもち、また、支配の末端に位置する大学にとって、大学共同体の自治なるものは幻想でしかなく、当局との対決もまた普遍的質をもつ。その闘いの本質をもっとも鋭く自覚した集団、東大全共闘のみが真に最後まで闘いえたのだ。

この中にあって、日共、民青は大学民主化に闘いを歪曲し、一方で大学当局の共同体幻想を補完しつつ、他方で彼らのいうところのトロツキスト追放運動を展開した。だがかかる路線が政治的に破算し、大衆的に乗越えられるや、大学当局の機動隊でしかない民青ゲバルト部隊を導入し、完全な反革命暴力集団になり下った。

また、良識ある一般学生といわれる右翼秩序派の諸君は、もともと闘争に無関心という敵対行為を行ない、せいぜい東大生という特殊階層の利害の表現として、学生の権利主張を行なったが、闘いの進展とともに、自己の存在そのものが揺り動かされるや、その将来的に保障されている体制内の展望にのめりこみ、闘争に敵対していった。

かくて全十学部の無期限ストに倒れた大河内前学長にかわって、十一月に登場した加藤執行部は、破算した国大協路線の手なおしの上に、学生は大学共同体の一構成要素として一定の権利を有するが同時に大学の秩序維持の責任を分ちもたなければならないという、近代化路線をもってあらわれ、闘争の収拾にのり出した。

学生が自らの手で、自らの首しめることを強要する、この危険な本質を見ぬいた東大全共闘は、闘争体制の一層の強化をはかり、全学封鎖方針を公然とおしだした。

だが、留年と大学院制度の恫喝にふるえあがった右翼秩序派とそれに癒着しきって反革命をはたらくことにより、自己のヘゲモニーの回復をねらう日共、民青は、当局の収拾策動にのめりこみ、何がなんでもスト解除へと反全共闘運動を展開した。

だが、東大闘争の本質的課題は全国学園闘争を横軸とし、70年安保、沖縄闘争を縦軸とした、現在の日本学生運動の原点に位置するがゆえに、全国の学生、労働者と連帯の基盤をもち、東大全共闘は全国の闘う学生とともに、道義性と論理性に支えられたわれわれの暴力をも使って、学内収拾策動を粉砕し闘いぬいてきた。

この学内収拾策動粉砕ののちに闘いの本質が一切の活動をともなって表わになった。入試実施の一点で一致した加藤代行、右翼秩序派、日共民青の狂言まわしは、歴史の舞台の片隅に追いやられた。

真の主力は登場した。日本帝国主義と闘う労働者、人民、学生がその生命がけの闘いを全面に登場させた。もはや、問いは不要である。

全国の闘う学友諸君！労働者、市民のみなさん！東大全共闘は全国の津々浦々で、燎原の火のように燃え広がる学園闘争の、最先端に立って闘うであろう。

いま学園闘争の暴力的圧殺を通じて七〇年にむけての治安体制の強化と、東大の大学院大学化にみられるように、大学のあらたな再編と、それを通じてする帝国主義日本への包摂がもくろまれている。だがこれに対する全国学友の闘いは、現在、日本階級闘争のもっとも重要な一環をなしている。

そして、この闘いこそが七〇年、いますでに始っている安保・沖縄闘争の巨大な前進をつくっている。東大全共闘は一月十八・十九日闘争の高い質でもってその内実を強化し、再武装の上に再封鎖と真の東大奪還を貫徹する。いわんやきたる二月四日沖縄全国ゼネストと呼応して全都結集でもって十八・十九日闘争を上まわる力でもって、権力の闘争圧殺を粉砕するであろう。

全国の学友諸君！労働者、市民のみなさん！いますぐ第二、第三の安田解放講堂を構築せよ！第二第三の神田解放区を確立せよ！そこにはじめて全国学生の連帯と闘いの前進がある。

自民党文教制度調査会試案と三月中教審答申に対する総反撃を開始せよ！　全国学園闘争を通じて闘いの拠点と、闘う主体を結成せよ！　七〇年代日本階級闘争の勝利めざして！

一九六九年一月二十四日

70年安保と私たちの運動

講演と映画の夕べ

講演　新崎盛暉氏（沖縄資料センター　沖縄問題研究者）
場所　全電通会館
日時　二月十日午後六時
主催　平和のための婦人行動委員会
後援　軍縮協・全大阪反戦

視点

東大闘争が示すもの
新左翼へ何を提起したか

佐藤自民党政府は約一万名の警察機動隊を動員し、二日間にわたって東大安田講堂をせめたてこれを落城させてみたものの、その結果、全国いたるところに「砦」を作られることとなった。「安田城」は落されたが敗北はしなかった。この二日間の攻防戦と局地的敗北によって学生たちは意気消沈したのではなく、逆に勇気づけられた。いま全国各地で学生は総攻撃にかかっており、大学当局は学生に要求をのまされ各地で勝利している。東大制圧は、政府の意図とは逆に全国の学生に一大攻撃をかける出撃ラッパとなった。もしこの闘争のなかから入試中止においこまれる大学がさらにふえていくならば佐藤政府にとって非常にやっかいな事態が生れることは明らかだ。

「三十五時間、機動隊の手段を選ばぬ弾圧を撃退し、バリケードを守り抜いてきた解放講堂は、十九日午後五時五十分、ついに機動隊の泥靴にじゅうりんされ、なかにあって英雄的に闘い抜いてきた五百人の同志たちは、全員不当逮捕された。しかし、十八日、十九日の両日にわたって八千五百の機動隊の攻撃を、そして権力の闘争圧殺策動を完全に粉砕しつくしてきた未曽有の闘いは①東大闘争が帝国主義権力との熾烈な全面対決の闘いであることを天下に明らかにして②全ての抑圧された人間たちに闘う勇気を与える上でかえがたい物であったのだ。その証拠にこの闘いは両日にわたって、神田本郷地区で、圧倒的な学生、労働者を結集して闘われた、都市ゲリラ闘争に発展的に止揚され、今や個別学園闘争としての東大闘争は圧殺策動に狂奔する権力の思惑とはウラハラに、全国的、全人民的反権力闘争へと深化、拡大をつづけているのだ」（東大闘争全学共闘会議発行「進撃」号外一月二十一日発行）

事態はまさにこのとおり現在進行中である。

（一）

学生の反体制的エネルギーの奔流が示すものは、大学が日本帝国主義体制の矛盾の環のひとつであり、そのなかで最も弱い結節点だということであろう。この見方からすれば、いま起こっている学生の闘いは、労働者階級にとって自分の息子の問題あるいは自分の将来の上役の問題ではなく、労働者階級そのものの問題なのだ。

本紙三面に大阪の堺経専でおこった事例が示しているように、教育は資本の金もうけの道具でありデマ宣伝をして生徒をあつめても教育者を罰しないばかりか、あえて法を歪曲して、教育＝資本家を政府と自治体は保護しているのである。教育とは資本家の金もうけの手段でこの教育者＝資本家＝詐欺師を人民の攻撃から守るのが政府の役目なのだ。この日本の教育の基本的関係を堺市におこった事件は、はっきりと暴露した。東大の闘争は、この日本の教育の基本的な原型を、資本主義体制全体のなかからあばきだしたのであった。

現在の大学は日本帝国主義復活の一環としてそのマンパワー（人的能力）開発計画のなかにはっきり位置づけられている。それを国家の政策として公式に採用したのは、昭和三十七年池田内閣に経済審議会が答申した「経済発展と人的能力開発」であった。それは佐藤内閣によって「中期経済計画」（昭和四十年一月閣議決定）のなかで継承されている。そのなかで大学について次のようにいっている「今後労働力の量的逼迫さの優位が薄れていくことを考慮すれば、国際競争力の激化に対処して経済の発展を図っていくうえに、人的能力の向上と科学技術水準の向上に努めることがいよいよ必要とされている」「高等教育を希望するものの比率は、今後、経済の発展とともに所得水準の上昇や進学意欲の向上によって上昇するものと予想される。しかしながら、ハイ・タレントとしての資質を有する者の比率は、おのずから限定されているものと考えられるので、これらの者に対する高等教育の質が低下しないよう配慮し、重点的選択的に行なわれなければならない。かかる観点から、ハイ・タレント養成機関としての大学学部とその他の高等教育機関の役割を分けて考え、志願者の逓増を考慮しつつそれぞれの必要に基づいた教育の充実を図り、また、大学院を大学学部の上位に位置する教育機関として充実することを考慮する必要があろう」

大学を資本主義的再生産過程の最も重要な一環として位置づけ、[illegible]おもいのままに回される歯車の一つになったとき、この歯車の内部に体制そのものに対する反対派（思いのままに動かされることに反対するだけでなく）が生まれるや、それは、資本主義体制内部にふかくはまりこみ、そのなかで重要な機能をはたしているがために、資本主義体制と重大な摩擦をおこさざるをえなかった。

東大闘争はこのような国の基本政策の是非をまず問いただした。山本全共闘代表は次のようにいっている。「大学は文部行政機構の末端としての役割をはたすべく、複線化構想が出てきた。つまりマスプロ大学と、大学院大学を分離していく。その大学院大学の頂点にある東大は、権力中枢をになう部分、高級官僚、管理職、技術者を養成するものとして位置づけられ、同時に研究課程そのものをも[illegible]その中にあって教授はどのような意味をもっているか。教育および研究課程をみずから管理運営し掌握することによって彼ら自身の研究、知識の独占が保証され、社会的、経済的地位を保証されている存在なのだ」（朝日ジャーナル十一月十七日）

このような大学の反人民的機能とそれをささえる教授会自治の反動性を、東大全共闘は権力に対する徹底した挑戦をもって、すべての搾取され抑圧されている人民のまえに告発した。だからこの闘争を「入学試験」の次元でとらえようとしたすべての既成の左翼政党は、東大闘争の問いかけすらつかむことはできなかったし、つかもうともしなかった。

（二）

大学が支配体制の最もよわい環だということは、まず第一に学生の権利意識の向上と無権利状態にみることができよう。支配階級は人民の権利を制限するのにいろいろな口実を使うが学生に対しては「学生は修学中の者であり、社会的責任を十分負いうる立場にないので」「大学の人事、財政、試験、カリキュラムなどの基本問題についての学生の権利主張は」「厳しく排除されなければならない」と昨年十一月の自民党文教制度調査会の中間報告はかいている。いま学生は一方的に教えられることに満足していない。大学の教育の場に参加する主体として、教育に対して能動的に働きかけるために、自己の権利を主張している。自民党のように未成年者だ、あるいは親がかりだという口実で人権を制限する、とくに思想信条を制限する立場は、わが国の大多数の学生の自覚の向上から極端にかけはなれていくだけでなく、資本主義国のブルジョア政府の学生対策からみても、孤立している。このことが日本の学生運動を資本主義世界最高のレベルに押しあげているとしたら、皮肉である。

大学には一方的で、なんらの救済手段を持たない処分制度があり学生は自己の意志を暴力による以外に表現できない条件にある。京大の総長団交が三十六時間かかったと商業新聞はかきたてるが、その三十六時間は、三面にあるようにただ三点の事実を確認するのにそれだけかかったのであり、総長がいかに不誠実な答弁をし逃げまわって、時間を浪費させたのかを示すだけであり、このような大学の学生をなめきった態度に対して学生は実力をもって以外に立上がるすべをもたないことを示したのが三十六時間の総長団交であった。それ故京大教養部は、この団交の直後無期限ストに突入した。

逆説的にいうならば、現在の労資関係が理由はともあれある程度安定しているのは、労働者が長年の闘いによって団結権を確保してきたからであって、労資関係の安定状態は学生の無権利を証明するものであろう。

（三）

十八日と十九日の闘争は、東京帝国主義大学解体の闘いが、支配階級との全面的対決を誘うものであって、日本人民解放の闘いの一環であることを示した。したがってこの目的を達成するためには日本人民の大多数を反体制の側に獲するために、長期にわたる闘いをくりひろげようとしている。

全共闘がかかげた七項目（①医学部不当処分白紙撤回②機動隊導入自己批判、導入声明撤回③青医連を協約団体として公認せよ④文学部不当処分の白紙撤回⑤一切の捜査協力やめよ⑥一月二十九日以来の一切の事態に関して処分するな⑦以上を大衆団交の場で、文書をもって確認し、責任者は辞職せよ）要求運動は学生の自治活動弾圧に対する抗議であり、学生の権利拡大の闘争であった。この改良と民主主義拡大の要求を徹底的に貫ぬこうとすれば、現在の「東京帝国主義大学」の枠内では解決しないし、この体制の枠を突破することを必要としている。

東京帝国主義大学解体のスローガンをかかげた東大全共闘は、日本人民解放の闘いに新らしい課題をなげかけた。その先進的意義は高く評価される。しかしスローガンの正しさは人民、少なくとも学生の大多数をそのまわりに結集しえたときに、始めて証明されるのではなかろうか。そのためにはこのスローガンの政治的思想的内実をもっと豊富にしなければならないだけでなく、労働者、農民、学生、市民が、それぞれの生活のなかでこのスローガンと同質のものは何かをあきらかにし、そのための運動をそれぞれの場所でつくりあげていくことによって、可能となるであろう。東京帝国主義大学解体の運動と日常の闘争との関係このスローガンの日本革命のなかでの位置ずけなど、新らしい運動が提起した課題は極めて大きい。東大闘争の普遍性とは少なくともこれらの問いをつけとめることではなかろうか。

日共代々木派＝民青の誤りは日常要求をかかげて改良闘争をやることにあるのではなくて、改良闘争を既存の秩序、体制の枠内でしかしないところにあるのではないのか。いまわれわれに必要なのはこの代々木路線に反発するあまり改良闘争をも捨て、反体制思想で行動を統一することを急ぐのではなく、攻撃的に要求獲得闘争をおこし、学生の大多数を味方につけ徹底的にこの要求を闘いぬくことである。現在の情勢が支配階級にとって危機であるというのは日常要求さえもが、それを徹底して闘いとろうとするかぎり、支配階級の利害とただちに対立するところにある。その意味から、日常要求そのもののなかに政治要求が内在しているのである。

（四）

現在学生運動は、東大日大の闘争がきりひらいた高揚のうねりにのって、前進し、勝利を獲得している。このなかで学生たちは、若干の経済的譲歩とひきかえに、学生の権利をうばい、大学管理体制のなかに、かなしばりにしようとする近代化路線の反動性をみぬきこのような改良を拒否して闘っている。いまの学生運動の高揚のたかまりと大学当局の動揺のなかで学生は、有利な情況のもとで、第一に獲得すべきものは権利という武器である。これをできるだけ多く広く獲得し、次の闘争にむかって、陣地を築き、その陣地を権利の武器で強化することを必要としている。そして次の攻撃のために前進しようではないか。（K）

京大統一派（民青）が動揺
東大民青に自己批判要求

京都大学医学部統一派（日共代々木派＝民青系）は二月二日「われわれは自己批判する＝東大闘争における民青の犯罪的役割について＝」と題するビラを配布した。このなかで統一派は東大闘争「圧殺の責任の一端を担ったという厳しい自己批判を自らに課すと同時に、東大の民青に対して民主青年同盟総体に対しても自己批判を要求」している。この内容は決して東大闘争における代々木派の犯罪的役割を十分に暴露したものではないが、民青系内部からこのような反逆の動きがでてきたことは、京大で五者共闘（日共代々木派＝民青系）が大学当局の私兵となって学生に対してロックアウトをかけたことを契機に、日共代々木派は多数の学生から信用をうしない、民青系が握っている同学会の妨害にもかかわらず、医学部の一部、教養部、文学部でストライキに入っているとき、京大の学生教職員の間で大いに注目をあつめている。

(1) 我々にとって東大闘争とは何か

東大闘争は終わったのか、東大闘争は機動隊による戒厳状態のもとで圧殺されたのか？

われわれは断固として否と答える。東大闘争の提起した課題とは永続的なものであり、たとえ一時的表面的に終息しようとも、必ずや、再び闘いの炎は燃えあがるにちがいない。そしてわれわれは、東大闘争の提起した課題を自らの課題として提起し、しかも、われわれの今回の医学部闘争＝医局解体闘争を「いかにして東大闘争を乗り越えうるのか」という問いかけのもとに出発しなければならないと考える。

それ故に、われわれ医学部統一派は「東大闘争とは何であったのか」「何故に東大闘争は圧殺されようとしているのか」という問がわれわれ自身に向けられているのだということを明確に自覚しわれわれ医学部統一派自身が、その圧殺の責任の一端を担ったのだという厳しい自己批判を自らに課すと同時に、東大の民青に対して、民主青年同盟総体に対しても自己批判を要求するものである。

(2) 東大闘争は何を提起したか

東大闘争は、全学的闘争としては、医学部処分の問題と機動隊導入を契機としていた。しかし、闘争の発展につれて、大衆の自然発生的な東大変革の要求は、単に大学の管理体系と学生の自治問題だけでなく、その土台をなしているところの大学における教育、研究の論理と体制へも向けられていったのである。

すなわち、それは帝国主義段階における大学とは何か、大学がどのような体系と論理によって、国家独占資本主義体制における国家独占の論理を擁護するヘゲモニー装置として、また、ブルジョアジーの分身としての高[illegible]機構としての機能を果しているのか、という現代の大学の存在様式そのものを問い、自らの存在様式そのものを問うているのである。

同時に、そのことは、大学がブルジョアジーのヘゲモニー機構であることをやめさせ、自らがブルジョアジーの有機的知識人として自らを形成していくのか、大学においていかにしてプロレタリアートのヘゲモニーを構築していくのか、という意味において、現代の革命への基本的視点をも示唆しているのである。

なぜなら、現在世界的傾向としてのスチューデント・パワーはドル、ポンド危機を基軸とする世界帝国主義体制の下部構造における危機を土台としながらも、すぐれて上部構造における危機、とりわ[illegible]ある。

(3) 東大闘争の経過＝民青の役割

東大闘争は大まかに三つの時期に分けられるだろう。第一期は医学部全学スト突入から第一回安田講堂占拠まで。第二期は、機動隊導入から大河内辞任まで。第三期は加藤代行、新執行部登場から現在まで。

第一期において東大民青は、処分問題を東大の体質と国大協路線に深く根ざしたものとして[illegible]内制＝国大協路線＝教授会自治粉砕）と無期限ストの方向を集約[illegible]部省再攻勢と統[illegible]態である。

[illegible]も明らかになっ[illegible]割は何か。それ[illegible]＝民青ー右翼の[illegible]しい学内秩序の[illegible]対する実力排除[illegible]なのである。

(4) 民青の基本的誤ちとは何か

[illegible]表われた民青の[illegible]の四点に要約で[illegible]主義段階におけ[illegible]何かを明確に把[illegible]る。第二点は、[illegible]階規定の問題、[illegible]ズムの評価と[illegible]

看護婦さん求む！
正看・准看いずれも若干名
反戦運動に関心のある方歓迎
連絡は新左翼社まで

総長の辞任を要求

京大教養、無期限スト

他学部へ波及の動き

京都大学の寮闘争委員会は、一月十四日①無条件増寮（学生の完全自主管理）②大学の二十年計画白紙撤回③寮経理の全面公開を要求して総長と団体交渉をおこなったが十六日未明決裂し、学生部を封鎖した。二十一日この学生部前で全関西学生集会をおこなおうとしたところ、奥田総長は「他大学の学生から京大を守れ」「日大生七百名が東京からくる」とのデマを流して、本部をロックアウトすることを決定し、そのために五者共闘（日共、民青系）にヘルメット、棍棒、食料、その他一切の資材を提供し経費を支出することを大学当局は承認した。二十一日集会のために正門突破をはかった、全学闘と支援の学生たちに放水と薬物をあびせた。二十三日学生部封鎖は、彼らによって解除させられたが、この後直ちにおこなわれた五者共闘による寮闘委つるしあげの集会では、五者の大学当局、官憲とのゆ着が暴露されるや立場が逆転し、五者をつるしあげる集会となった。そしてただちにこの集会は全学闘による総長・学生部長団交にきりかえられ、さらに二十五日から団体交渉をもったが決裂し、二十七日うちきった。教養部では三十日、代議員大会をひらき①闘争破壊のための本部逆封鎖＝ロックアウト及びデマによる煽動について自己批判せよ②学生部封鎖の暴力的排除のための武器資材提供を自己批判せよ③機動隊導入要請を自己批判せよ。官憲の捜査に協力するな④奥田総長は国大協会長をやめよ⑤今回の闘争破壊の責任をとり、総長・学生部長は自己批判の上辞任せよ。公安機関としての学生部解体⑥今回の闘争に関して一切の処分を行うな⑦寮三項目要求（無条件増寮・経理全面公開・二十年計画白紙撤回）をのめ⑧以上の点を大衆団交の場で文書で確認せよの八項目を要求して無期限ストに入ることが提案され、出席代議員六四二のうち賛成三八八反対一一五で可決され、三十一日より無期限ストに突入した。

八項目のこの要求は単に教養部にかぎられるもの ではないし、医学部六回生はすでにストライキに突入しており、他の学部に拡大していくのはさけられないものとみられる。教養部闘争委員会と工学部院生共闘会議は次のような呼かけをおこなっている。

決裂！妥協はない

教養闘委が決起訴え

諸君、三日間ぶっ通して続けられた総長団交でわれわれは何を得たのか。それは総長の話し合い路線なるものが一切欺瞞であり、彼が行政官僚＝権力者として、われわれのいかなる論理をもってしても踏みこえることができない、厚いカベの彼方にいるということを再確認したのみであった。

我々は何をめざして追求したのか

われわれは二十五日、二十六日二十七日のまる三日間の団交において八項目要求をかかげ、二十一日以降のロックアウト内に現出された「狂気の三日間」における彼の当局の最高責任者としての罪状（暴力集団＝五者との結託、デマによる煽動、ヘルメット・武器の供与、学生部の電気・水道・ガスのカット、学生に対する執拗な放水、学生部への毒ガス撒布、学生部封鎖武力撤去等々）を、事実をもって徹底的にあばきだし、明確に学内ファシズムの組織者＝ファシストとして、糾弾しつづけた。

われわれは既に、このような、いかなる手段をもってしても学生を弾圧し抜くという当局の下で、学生＝被管理者として存在することは我慢ならないし、またそれ故にこの闘争は、学生存在としての自己を否定するという高度の質を必然的に内包するのである。その意味で団交における総長追及の過程は同時にまた、痛切な自己認識の過程であり、その自己否定を媒介としてあくまで反状況的に闘い抜く主体の確立の過程であった。

総長は何を答えたか

確認書一、寮闘争が実力封鎖闘争に発展した時は、寮問題の解決は話し合いではだめで、封鎖を実力で解除するのが唯一の解決方法であったと考える。

確認書二、私は封鎖闘争がどのような意味をもっているのかわからないにもかかわらず、封鎖問題について話し合わないで一方的に封鎖を実力解除したことをみとめます。

確認書三、二十一日機動隊の出動を要請した際、機動隊がひきつづき学内に立入らないように東一条の道路上に、本学学生が座り込み、そのため機動隊が正門まで到達しえなかった。私はそのような学生が警察力で排除され、道交法違反・公務執行妨害の罪で逮捕されてもやむをえないと考え、あらかじめ警告を与えた。

以上に立ち現われる人物は一体何者であろうか。団交の過程で、常にヌラリクラリと話をはぐらかし、恥ずかしげもなくイネムリやダンマリをくり返し、その挙句確認したのが以上の点である。これがわれわれの「総長」なのである。

自らアラユル武器を駆使して暴力的に封鎖解除しておきながら、なんらその不当な圧殺行為を自己批判しようとせず、責任をとろうともせず、ただ「封鎖は悪い」「暴力は悪い」をくり返すのみである。われわれは断じてこのような人物をわれわれの総長であると認めるわけにはいかない。彼がいかなるポーズに出ようとも、単に一個の行政官僚＝弾圧者にすぎないことはもはや白日のもとにあばき出されたのだ。彼にとって大切なものは秩序であり建物であり、それ以外の何物でもない。

擬制の終えん

曰く「大学の自治」曰く「大学共同体」曰く「話し合い路線」等々、かってはこれらの言葉が何か実体をもつかのように流通していた。

これらの擬制をもって巧妙に被管理者をそれと気づかせることなく管理し抜くこと、これなくしては権力は自らの秩序を維持しえない。今やその仮面はすべてはぎとられ、むき出しにされた暴力的管理機構、そしてそれとのわれわれの全面的対決あるのみである。そして君自身にも、今や明確な形で問いが発せられているのだ。

我々はいかに闘うか

総長団交はいまや決裂し（当り前！）もはや、いかなる形においても妥協点は見い出せない。

われわれは一・十六における封鎖の思想を再び発掘し、われわれのなし得る最高の戦術＝無期限ストライキによって挑戦のノロシを上げよう。

「民主化」乗越えよ

工学部院生共闘会議

外に仮想敵をつくりそれに注意を集中することによって、たくみに内部で進行しつつあるものから眼を逸らせるのが支配者の常だ。

▽君たちは何を守ったのか？▽

黄色ヘルメットと角材を持ってロックアウトのバリケードを「死守」したわが工学部の院生、学生諸君！君たちは今、いいようのない虚脱感の中で一切を「異常事態」一夜の悪夢として自らの行動を、忘れ去ろうとしているのだろうか。あるいは、ある悪名高い「民主化」（その実、近代化）路線に再びしがみつこうとしているのだろうか？

他学部に先がけ、そして他学部の先頭に立ってバリケードを築いたわが工学部院生、学生は、誰よりもこのたびの行動に責任があるし、真剣な問い返しが必要だろう。たとえば、真先きにデマに踊り、狂奔した君たちの、他学部学友とは異なる体質を、等々。さらに、そのような体質を形成した諸条件を。

たとえば、現体制下における研究活動とは何なのか、考えただろうか。「研究」そのものを神聖化し、また自らも社会に対して外在的存在であると想定しているのではないか。

まず、われわれは歴史的社会的に規定された存在としての人間であるという地点から、研究するわれわれを問い返していくべきではないか。われわれは「社会の要請」と「学問の確立」という美名の下に、実は、資本と国家権力の要請に従属して研究を日常的に行なっているのではないのか。国民不在の万博への協力しかり、生産者の立場に立ち消費者不在の商品試験の客観的役割が存在していることしかり、企業の立場にたった「公害」調査しかり。われわれは定められた枠の中での一定の技術的成果と引換えに、自らの主体性を売り渡しているのではないのか。

後期資本主義社会において大学とは「知的テクノクラート」を大量生産するための「知識工場」となり、入学してきた学生は、そこでは社会の要請基準に応じて加工されるべき「インプット」と見なされ、柔順性、万能性、実用性ＥＱＯを付与されて社会へ送り出されるシステムであり、われわれの日常的営為＝日々の研究活動はシステムにとって不可欠であり、そのの営為によってシステムそのものをも日々再生産しているのだ。われわれの主観的願望とは無縁な地点に（もしくは無自覚の内に）その客観的役割が存在していることその中で、なおも研究を続ける自分自身の分裂を、その矛盾を、追求すべき時が今やきたのではないのか。

再び逆バリケードに話しを戻そう。君たちは確かに、大部分は右翼でも、民青でもないだろう。

しかし、君たちが主観的には自らの研究を防衛する為に起ち上ったとしても、客観的には京大当局－五者共闘－民青の行動隊として動いたと、見られても仕方がないのではないか。われわれの目標である帝国大学解体は、その管理機構（制度・仕組み）の粉砕にあるので、物理的破壊では決してない。民青・マスコミのデマ宣伝（「施設、器具が破壊される」）に惑わされてはならない。

われわれ、工学部院生共闘は、京大助手院生共闘に参加して、

①教室研究室の管理運営に対して一切の拒否権を認めよ！
②講座制を解体せよ！
③産学協同を拒否せよ！

の三項目を掲げて運動を進めている。

今、各教室で一定の「民主化」がすすめられている。しかし、その「民主化」さえ、教室の音頭とりで「民主的」にクラス討論、研究室討論をやり、封鎖解除を決議したから**勝ちとられたの**では決してない。学生部占拠闘争の背景の下、われわれが大胆に鋭く矛盾をあばき出した実力闘争を組織し、全学の学友と共に闘ったから勝ちとられたに他ならない。実力闘争なくして京大闘争の勝利はありえない。

工学部の闘う学生院生は、T院生共闘、T闘争委に結集しよう。

無期限ストに入った京大教養部

″全員を高校卒に″

欺瞞に抗議し占拠

堺経専

大阪府堺市にある堺経理専門学校では、各種学校でも卒業までに高校に昇格するからと生徒を集めておきながら、いま在籍している二、三年生の一部しか高校に編入させず、大多数の学生を無資格のまま学校から放りだそうとしている。これに怒った学生、父母、教職員たちは、全員高校へ編入させろと、試験ボイコット、学校占拠などで闘っている。

四十一年四月から発足した堺経理専門学校では、この三月に卒業予定の三八〇名あまりのなかで、高校の卒業証書をもらうことのできるのは一二八名だけ、学校はのこりの約二百五十名の生徒を、三年間おなじ授業をうけながら各種学校卒のままで学校からおいだそうというのだ。

四十一年四月に開校になった堺経理専門学校では、三年間に高校に昇格し、全員高校生として卒業させると宣伝して生徒を募集した。

四十一年八月に大阪府に高校昇格申請の書類出したが四十二年二月にみとめられず申請を取下げた。この事情が秘密のうちに「昇格」から「新設」に運動の目標がきりかえられた。

日共系が組合員のなかにいて、闘争を妨害するなかで、一部の先生は、終始、全員高校生編入を主張してきた。文部省の指導をうけた学校長や大阪府が学校教育法施行規則第六十条（編入学許可について）をたてにとって全員編入ができないと主張したとき、この先生達は六十条の解釈のあやまりを暴露し高校編入の基準は年令と学力しかないことを明らかにした。

しかし学校は編入試験を強行し成績の「優秀」なものだけ、高校編入を九月十六日に強行した。

十二月五日には三年生代表と校長とが徹夜で団体交渉したが、六日午前二時半に決裂し生徒は直ちにバリケードを築いて学園封鎖に入った。しかし教師によってくずされ封鎖は失敗したが、二十名が二学期の試験をボイコットした。

学校では学年末試験前に何とかクラス編成替えをしておかないと高校卒の生徒から成績の悪い生徒ができたとき、全員編入運動の再燃がさけられないため何とか強行しようとしている。

堺経専の理事長指吸氏は、経理事務所を大阪、堺、岡山、和歌山にいとなむ企業家だ。ベビーブームにのって経専から高校へ、大学へと成長する学校経営をみて、自分もひともうけし、同時に経理事務所のための労働力を確保しようとはじめたのが学校経営に手をだした動機だったとおもわれる。しかし指吸氏がのりだしたときにはもうベビーブームはおわり、私学経営の試練の時期がまっていた。

学生数がふえる間設備拡張をしてきた私立学校は、学生が減少しはじめたいま、企業の防衛に血眼になっている。私立学校で作っている私立中等高等学校連合会は、向う三年間一校当り百二十名以上生徒を増やさないことを昨年決定したといわれている。

文部省や大阪府は私立学校経営者のもうけを守ってやるために、法律まで歪曲して生徒と親をだましているのだ。堺経専の教職員、生徒、父母の闘いは続いている。

東大闘争支持

新年決起集会

闘いの年一九六九年の年頭を飾る「安保粉砕新年決起集会」が、毛沢東思想青学共闘会議、人民解放先鋒隊、学生解放戦線の主催で一月二十一日午後六時より、大阪厚生会館小ホールに三百五十名の労働者、学生、市民を集めて開かれ「一九六九年を迎えたアジア情勢」と題する坂本徳松AA連帯日本委員会理事長の講演、東大全学共闘会議代表の「東大闘争報告」などがおこなわれた。

大衆路線を欠く

日中大阪総会で激論

日中友好協会（正統）大阪府本部の第十四回総会は、一月二十六日午前十時より、大阪府教育会館に、百五十余名の会員が参集して開催された。

総会では、全体集会での報告・提案、分散会での討論、全体集会でのまとめと決議、役員改選などがおこなわれた。

総括と方針が討議された分散会で特に問題になり討議が集中したのは、昨年末のはぐるま座の″嵐″公演をめぐって示された、府本部の指導と議会のあり方についてであった。

″嵐″の公演を府本部が主催したことに対する批判は、その準備中より、すでに会員の中から提起されていたが、府本部はこれを無視したばかりか″嵐″の公演運動を、日中友好の踏絵にして、これに反対する者は、非友好者のような取扱いをおこなった。

この日共代々木時代と変わらぬセクト派閥的しめつけを排し、もっと広範な大衆、とくに現在戦闘的に闘っている多くの人びともふくめた大衆の日中友好運動への結集を進めるため、徹底した大衆路線をつらぬき通すことが必要であるとの意見が出された。この論議の中で府党左派常任の自己批判があったが、さらに本部としての責任の追求が夜の全体集会にもちこまれ、雨宮理事長の自己批判がおこなわれた。

役員改選では、今まで空席であった会長に、大塚有章氏がえらばれた。

参加したK君談「左派一辺倒の路線が運動のワクをせばめ、日中友好運動に混乱をおこさせている点は批判されて当然だ。しかし、これを追求することに終始して、肝心な活動方針の討論が深められなかったことは残念だ。お互いにもっと、日中両国人民に責任をもった謙虚な態度で友好活動を進めたい」

マルクーゼは語る

有名な急進的哲学者ハーバード・マルクーゼ氏は十月二十日、ガーディアン紙の記者ロバート・アレン氏とのインタビューで、最近の階級闘争、黒人解放運動やステューデントパワーについて、次のように語っている。（ガーディアン紙より転載二回にわけて掲載する）

新しい転換点

——過去数年間における学生運動と黒人運動の戦闘的な高揚、とくにフランスの最近のうごきをみて「一次元的人間」であなたがだした結論を、いまどのように考えていますか。

答　一月に発行される私の論文「解放についての試論」(An Essay on Liberation)で、評価しなおしました。あらゆる点で私はもっと楽天的になりました。その主な理由は、五月と六月にフランスで起きた事件です。今ではこの事件はいわば、棚上げされています。それというのも、たとえ打破られたのではないにせよ、事件は少なくとも、抑制されてしまったのですから。けれども私は、これがある転換期を示すものだと考えています。というのは、この事件は全ての歴史的状況を照らしだす象徴的な出来事だからです。

フランスの事件はまず第一に、急進的変革—お望みならば革命といってもよろしい—が、労働者階級の外から生じうる、そして、それがおこるや、運動の力が労働者階級のなかで、戦闘的な反対派を活性化させうることを示しました。

第二に、フランスの事件は、労働者階級のうち高度に専門的な資格をもつ層—科学、技術要員—が、学生の最も急進的な要求に対して非常に素直に応じた、つまり急進的な政治的要求に応じたことを示しました。

共産党と共産党系労働組合に動員され、因襲的な経済要求をかかげさせられたのは、専門的資格のない非熟練労働者層でした。私は、これは非常に意味深いことだと考えています。

徴兵を拒否して、公衆をまえにして集団で令状を焼くアメリカ・ボストン市の青年たち

第三に、フランスでの発展は、根本的に新しい特徴をもった革命の可能性を示したのです。それはわれわれの知的、文化的発展とともに起こり、もはや初めから生産力とか計画などの面からではなく、社会主義理論の伝統的概念をはるかにこえる、新しい要求と新しい目的をもった、質的に新しいタイプの人が社会主義社会の建設者として、出現したという面から社会主義を問い直すものです。

私のいっていることを多分最もよく表わしている例は、事件の間にパリ大学の壁にかかれた有名な落書です。それらは次のようなスローガンに要約できます。「すべての権力を想像力へ」このスローガンは既成のものとは質的に異なった、いわゆるユートピア的な生活様式——しかし実際は決してユートピアではない——を強調しています。

私にもっと希望をいだかせる現象は他にもあります。それは第三世界とともに資本主義国家における発展と関連しています。その主な徴候は次のような象徴的事実です。つまり地球上で最も貧しく、最も弱い人民のひとつが、技術的に高度に発達し世界中でもっとも武装され裕福な国家の巨大な権力に対して、効果的に抵抗している事実です。このことは、精神的、肉体的な力が、最高度に整備された帝国主義国家の軍隊に対してさえも限界線を引きうることを示しています。

もうひとつの徴候は、キューバ革命の発展です。私のみるところでは、キューバでは官僚的な手段を使った上からの改革でなく、下から社会主義を打立てようとする試みがなされているのです。恐らく中国の文化革命もその限りでは社会主義建設途上における、官僚主義と権威主義的傾向に反対する闘争ではないでしょうか。最後に合衆国における反対派の成長があります。

いまのべたこれらの諸傾向から解放の展望を問い直す必要があります。

——あなたはフランスで、より急進的な要求をかかげたのは「非専門的」労働者ではなく、むしろ「専門的資格のある」労働者であったという事実に言及されましたが、このようなことが起った理由をどう考えますか。

答　われわれは次のような革命の概念を考えねばなりません。つまりかなり機能的で高度に発達した産業社会で、生産性が非常に高い水準で起りうるかもしれない革命、貧窮と惨めさと苦悩の直接的で原始的な表現ではないような革命です。

さてマルクスによれば、貧困に根ざした革命だけが唯一の可能な革命ではないことを、私はよく理解しているつもりです。マルクス主義の理論では、労働者階級のより先進的分子によって遂行される革命が予想されています。しかしその理論は、支配装置がひどく弱まり崩壊しつつある社会ではなく、恐ろしいほど結合力があり、力強く機能している社会では、どのような条件の下で革命が起るのかについて、詳しくのべていません。

精鋭主義と改良主義

——この国の新左翼のなかには、いわゆる新しい労働者階級が、社会変革のかなめになると考えている人たちがいます。しかしながら急進派が労働者階級のなかのひどく抑圧されている層よりも、特権的な層にむかっていこうとするために、この考えを主唱する人びとは精鋭主義とブルジョア改良主義という双生子を生みだざるをえないと思います。この傾向にあなたはどう対処したらよいと思いますか。

答　新しい労働者階級という概念について若干のべさせて下さい。この概念にはかなりの真理があります。発達した産業社会では、ブルーカラーはホワイトカラーにくらべて、単に数のうえばかりでなく、生産過程でしめる相対的重要度からみても、ますます減少する傾向にあります。かくして、新しい労働者階級は生産過程そのものから生れてくるのであって、単なる発明品ではないのです。

この新しい階層は今後生産過程のなかで、ますます重要で決定的な位置をしめるでしょう。客観的にみるならばこの階層は、資本主義的生産過程の抑圧的性質を政治的に自覚すればするほど、その意識の発展程度に応じて、社会変革の強力な担い手となるでしょう。

——もっと具体的にいってくれませんか。

答　さて、ゼネストがどんな結果をもたらすものか、考えてごらんなさい。もしそのようなストライキが持続され、二十四時間とか四十八時間とかに限られていなければ、生産から筋肉労働者を引上げることが、革命の始まりとなりうるでしょう。同様に重要な生産過程でかなめの役割を担っているこの新しい階層が、そのようなストライキを支持したならば、それは革命の終結が始まったといえるでしょう。

——精鋭主義と改良主義について最初に提起した問題にかえってくれませんか。

答　精鋭主義という言葉はひどく濫用されています。そういう使い方をすると、前衛というレーニン主義の概念も精鋭と呼ばなければならないでしょう。精鋭を何でも彼でも非難することはできません。どんな種類の精鋭なのか、彼らの目的は何か、社会主義の方向に進んでいるのか、それともその反対なのか、などについて考えなければなりません。今日の急進的グループについて、私は前衛、指導的少数派、あるいは触媒という言葉の方がいいとおもいます。このような少数派が反動的であるとは、必ずしもいえません。すべての大きな歴史的変革は、少数派から出発したので、多数派からではなかったのです。

さて改良主義ですが、その言葉をどんな意味で使うかによって違ってきます。社会主義を指向する運動のなかで、資本家階級を重視することは実際には、資本主義を能率的にすることに貢献することになるという意味で、改良主義という言葉を使うのですか。そういう可能性のあることはさけられないでしょう。けれども改良主義はいつか資本主義的枠組のなかに収まらない水準に達することができます。この水準に達する時、改良主義は革命的になり、改良が生産関係に基本的な変革をもたらすようになるでしょう。

オートメーション

——左翼内部にはオートメーションの問題へ綱領的にアプローチするのに重大な相異があります。資本主義の枠内でオートメーションに賛意を表することは、労働者階級の利益に反する反動的闘争に等しいと主張する人たちがいます。他方ではオートメーションの能力を産業労働者の要求に根本的に合体しうるならば、このことが革命闘争総体を高めることになるのだという人がいます。これらのことなったアプローチについて、どのように評価されますか。

答　まず初めにいいたいのは、オートメーションに「賛成する」「反対する」という言葉で問題にアプローチするのはおかしいとおもいます。オートメーションは産業社会における基本的傾向のひとつです。オートメーションは労働生産性をたえず増大させるための、資本主義社会に固有の構造的運動です。社会主義社会でのオートメーションは社会的に必要な仕事に費やされる肉体的エネルギーを、より多く機械に背負わせ、そうすることによって人間のエネルギーを解放し、決して労役とは無縁な仕事につかせることを本来狙っているのです。

この意味からオートメーションは二つの社会でともに基本的な傾向です。問題はオートメーションを促進するか、それともおくらせるかという点だけです。現在、組織労働者はオートメーションを統制することに興味をもっているように思います。というのも資本主義の枠内ではオートメーションは——若し一定の水準に落きなければ——技術的失業の増加を意味します。発展している社会主義社会ではそのような危険はみあたりません。そこではオートメーションは社会の技術的資源に応じて、促進することができるのです。

労働者階級の革命化

——プログレシブ・レーバー誌（プログレシブ・レーバー・パーティはアメリカの毛派で、その党の機関紙＝編集部注）の最近号で、あなたは現代資本主義下の階級闘争を過少評価したということで、非難されましたね。現在の階級差別では労働者が革命的対立をうみだすのに不十分であるという風にあなたの見解をとらえて、非難していました。さらに彼らは労働者階級の実際の経済状態が最近悪化し、ストライキがふえていることを指摘しています。この非難をどう考えますか。

答　まずはじめにいいたいことは、この記事の最初の見出しが、大変愉快だということです。その見出しは「教授は自分のへそを研究している」となっていました。これは記事のなかで、比較的に間違っていない部分——その部分は少ないのですが——のひとつです。私はここで告白しますが、私が自分のへそをしげしげと眺めるのは事実です。風呂に入っている時、たびたび眺めるんです。しかしそれが政治的犯罪だとは思いませんがね。

記事全体についていえば、それは恐らくデッチあげだろうというのが、私の最初の直感でした。本当の左翼ならば（たとえどんな左翼であれ、自分自身を急進的で正統な〝マルクスレーニン主義者〟だとみているならば）こんなものは書けないだろうと、私は思います。プチブルの知識人への憤りは、随分騒々しいものです。性に対する超ピューリタン的憎しみはひどく強いもので、そのためこの人たちは、フロイドの性エネルギーという概念を、私と同じ世代の俗物的な父親どもが、かつて理解していた——本当はまるっきり理解していなかったわけだ——のと同じように、性エネルギーを解釈するのです。明らかにフロイドとかフォイヤーに関することを、全部私のせいにしてしまうほど、この人たちの能力は浅薄なんです。彼らは私について「理想的な存在とは自己満足の天国であり、支配階級のスタイルをかりて永遠に底抜けの大騒ぎをやっていることだ」と書いていますが、その想像力たるや、抜群の趣きです。まったく私は労働者階級のふらち極まる敵であり、資本主義のおべっか使いにほかならないというわけです。（ここであの人たちはプラウダにいる相棒と文字通り一致するのです）

ただ考慮に値する「議論」がひとつあります。それはこの国の労働者階級は——いまおかれている条件の下で——革命勢力であることを私が否定したことです。ここでもまたきわどい曲解があるのです。私は法人化された資本主義の下で階級衝突がないとは、決していっていないのです。私がいったのは、労働者階級の経済的性格のため、階級衝突は体制の枠内でまだ取扱えるということなのです。（したがって、私の主張を否定するのに、ストライキ件数をあげるなんて、馬鹿げています）私が指摘したことはこの体制がもつ内部矛盾は恐らく、かつてないほど大きなものであろう——同時にその内部矛盾に敵対しそれを克服できる体制の能力も同様に——ということなのです。私は生産過程と労働者階級の構造上の変化についてふれましたが、それは現に進行しつつある「統合」を下部構造という言葉で説明したのです。労働者階級を政治的に活性化させる（左翼化であって、右翼化ではない！）うえでこの数年間の発展をプログレシブ・レーバー誌の記録からみても、私の見解の正しさが証明されていると思います。ここはプログレシブ・レーバーの立場について、徹底的に理論的な討論をするのに適当な場所ではありません。次のような簡単な説明は討論をおこすことに役立つかもしれません。

合衆国のような非常に発達した産業国家では労働者階級を抜きにした革命は考えられませんし、体制の相対的安定が続いているかぎり、労働者階級をともなった革命は同じように考えられません。この安定が破壊することが、まさにこの安定によって妨げられている労働者階級の政治的活性化の前提となります。このまことに弁証法的な矛盾を解決することは、先進産業国家はもちろんのこと、全世界的規模——つまり第三世界と自国における解放運動、自由で「人道主義的」な社会主義建設（キューバ、中国の文化革命、ベトナム・ラテンアメリカからアメリカが手を引くこと）——での経済的、政治的如何によっています。こう考えてくると、労働者階級が革命的であるのは「自分自身において」であって、（いまだかつて）「自分自身のために」ではないという、マルクス主義的概念の正しさが明らかになるでしょう。第一段階から第二段階への移行、すなわち、政治的階級意識の発展が課題なのです。安定した条件のもとで、革命的大衆政党が全然ないときには、この仕事は戦闘的な指導的少数派にとって、絶望的なほど厳しい課題です。この少数派は旧い労働者階級に属していないからといって、恥かしがることはないし、劣等感になやんでもいません。少数派は自由であり正直だから、昔ながらのしかし危険的なほど盲目的な物神崇拝の助けをかりずに仕事をやってのけているではありませんか。

（つづく）　（訳者＝中村久雄）

私の発言

新左翼の新聞を一本に

——反帝　進

私は理論に弱い。ただ、既成政党は社会主義団体でないと確信出来るだけである。人民を社会主義理論によって引きつけてこそ、社会主義団体である。既成政党にはそれがない。むしろ世論の動向や人民の機嫌とりをしている。これこそ、資本家の手先がする事である。まして や、日共は諸闘争で明白な通り、第二国家権力である。したがって、実際に闘えるのは新左翼の人達である。

われわれはまず七〇年安保に焦点をあてている。しかし、現在のわれわれの勢力では安保粉砕は出来ない。ゆえにわれわれの勢力の拡大を計らねばならない。では最少限どれ位の勢力が必要であろうか？私は六〇万と見込んでいる。これは現在のわれわれには天文学的数字である。しかし、これだけどうしても組織せねばならない。ところがこの数字について考える者がいない。帝国主義者は数年先の事を考えている。それなのにどうして弱体のわれわれが、一年先のことを考えようとしないのか？私は疑問に思う。そこで、私は次の事を提案したい。

☆新左翼各派から計二千名のオルグ専用要員を作り、一カ月二人を完全オルグする。これはノルマ制にする。そして、毎月二千名のオルグ専用要員を増加する。これが成功すると十三カ月で、六〇万の闘う部隊が出来る。

☆マスコミ対策として、新左翼各派の新聞を一本にし、曜日ごとに責任を決め、毎日発行する。

現状からすれば飛躍すぎるかも知れぬ。しかし、新左翼で圧倒的な勢力、主導権を取れる力を持っている団体がない限り、各派のセクトを認め、競争して新左翼全体の力を増大する他はない。また、これを推進出来るのは反戦、全共闘、電通労研、長船社研であることを自覚してもらいたい。私は鈍才であるのでもっとすばらしい案があると思う。皆さんがこのことを真剣に考え早急に実行する事を切望する。私の意見を頭から笑うものは七〇年安保で泣くであろう。

（電通労働者二五才）